

かも市史だより

平成14年3月

No.5

◆編集発行 加茂市幸町2丁目3番5号 加茂市教育委員会市史編さん室 ☎0256(52)0080 内線480

■ 神像彫刻の発見 ■



▲ 男神像



▲ 猿



▲ 女神像

加茂市は仏像・仏画など文化財の宝庫です。平成十一年以来、市内全寺社の悉皆調査を続けてきましたが、今年度、県内では珍しい神像彫刻を見できました。

写真是下高柳の日吉神社の神像三体です。男神像（像高四七cm）と女神像（同二八cm）は室町時代後期で十六世紀の作品です。この他、猿（三〇・五cm）もありますが、時代はやや下がりそうです。豊臣秀吉の日吉丸伝説でも知られるように、猿は日吉神の使い、今でも比叡山延暦寺の東麓にある日吉山王神社では猿が見られます。

ちなみに、日吉神社の字名は山王原。近くには曹洞宗の善興寺がありますが、この寺は天正九年（一五八二）、天台宗から改宗したという伝えがあります。また、上高柳には、やはり元は天台宗だった本都寺（真言宗）があります。すると、今は天台宗の寺院はないものの、日吉神社の存在 자체、かつて天台寺院があつたことを示すことになります。下高柳の日吉神社が勧請されたのは、鎌倉時代の寛元二年（一二四四）と伝えます。文献史料のない間隙の中では、この神像は中世加茂の精神風土を物語る貴重な文化財なのです。

ムラに太閤さんきた

豊臣秀吉の天下統一によって戦国の世も終わりを告げましたが、加茂附近のムラびとが統一政権の力を知つたのは、秀吉の家臣たちによる検地によつてでした。

「太閤さん」と親しみをこめて呼ばれていた豊臣秀吉の家来が加茂附近のムラへやつきました。文禄四年（一五九三）のこと、耕地・屋敷地などの面積・生産力や耕作者を調べる検地のためでした。

われています。

天正十一年（一五六八）、織田信長の後継者の座をめぐる戦いに勝利をおさめた賤ヶ岳の戦で実施していきました。

現加茂市域の太閤検地は、



▲(写真上) 文禄四年上条村検地帳より

(写真下) 上条村検地帳末尾部分 増田長盛の家臣で検地役人を勤めた中山太郎右衛門の名がみえる。

検地帳を見てみましょう。第一段は所付と四級区分による田畠の等級、第二段は縦横の長さ、第三段は一反三百歩による面積、第四段は生産高、第五段は耕作者を記しています。末尾には、田畠屋敷の等級別合計面積、生産高、検地年月日、検地役人の氏名・花押(かおう)が記され、最後に総紙数を書いています。

豊臣政権の政策実務を担当する増田長盛が検地の総指揮をして検地が実施されました。

この加茂附近の検地に先立つ文禄三年に行われた会津の蒲生氏領の検地で、二割五分の生産高の増加が記載されているのに、翌四年五月、秀吉は「上方の検地でも五割や三割の生産力の増加が出ている。会津は遠国だから、それ以前の検地は緩やかにやるよ

うにと命じられていたから、今回の検地で、かなりの生産力の増加が出ると思っていた

上杉氏ではこれまで「町」という単位や納入する税額である「貫」で土地の広さを表示していましたが、田は勿論のこと、畠・屋敷地の生産物までも米に換算して表示する石高制を探るようになりました。土地と税制度上的一大変革です。

帳簿上、面積が増えれば、その分当然貢租も増えるわけなので、農民たちは、この検地のなりゆきをじつと見守っていました。

一反当たりの公定収穫高は、上田が一石三斗、上畠が一石で、中・下田・下畠は、それぞれ二斗ずつ下りで、屋敷は一石です。

これまで越後を支配して来た上杉氏は三六〇歩を一反としていました。ですが、この太閤検地では、三百歩を一反としているので、換算しただけでも帳簿上は面積が二割増になります。新開発地も記載されたでしょう。

この時期、越後は上杉氏の領地でした。それなのに、秀吉がどうして上杉領の生産高の増加をはかるのに躍起となつたのでしょうか。秀吉が各大名に課す軍役や城などの普請役は、大名領の生産高を基準にして課すので、検地による生産高が多くなれば、それだけ大名に課す軍役や普請役も増すことができるようになるから、豊臣政権のためでもあつたのです。

のに『此出来もすくなく候』と不満を述べていました。

二割五分位の生産力の増加では不満だ、という秀吉の意を受けたの加茂附近の検地だけが行わただろうことは容易に想像できるでしょう。



か も 私 史

お山、おさとつちとが呼びか
わす」と加茂小唄に唄われる
ほど活気があつて、朝六時か
ら夜の七時まで昼飯休み一時
間あるだけで休みなしで働き
ました。毎月、一日と十五日
が休みでしたが、加茂祭のあ
る五月だけは十五日に休まず
二十一日に休みました。

戦争が始まり昭和十八年に
一度退職しましたが、機屋が
企業整備にかかりハタゴ（機
織り機械）が壊されて没収さ
れるのを目の前で見た時は悲
しくて涙が出ました。

戦争後、「二十三年にまた工
場へ戻ると、仲間もみんな集
まつて来ました。二十五年に

高等科卒業後、昭和十年（一九三五）に機屋（はたや）の川捨に勤め始めました。機屋が全盛の頃で、学校を卒業すると女の子は機屋へ、男の子は家業を継ぐ者以外はタンス、建具の仕事についたものでした。「加茂の明神、弥彦の

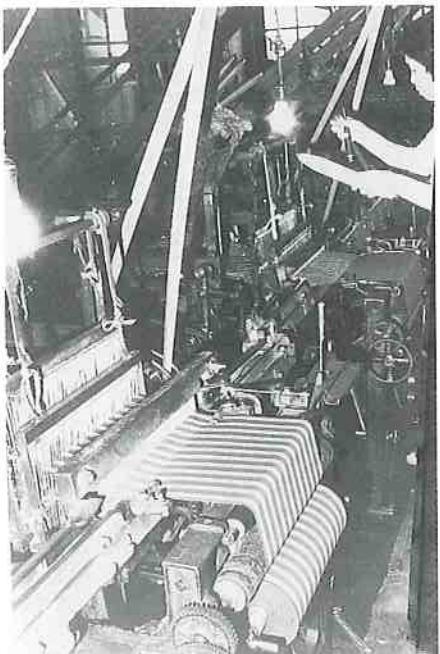


学校町

加茂の機屋で働いて



▲大正時代中期、機屋勤めの女工達が集まつた運動会（新潟日報事業社『写真集あるさとの百年三条・燕・加茂』より）



▲昭和二十年代頃の手動による機織機（はたおりき）

結婚して根古屋に新所帯を持ったので、勤め先も五番町にあつた川捨の本家の川徳に移りました。戦後は朝八時から夕方五時までの勤務になり一週間に一日は休めるようになりました。私は機を織る前の仕事で布幅と丈を決めるセイケイを担当していましたが、生糸にのりを利かせるノリヅケ、セイケイした糸をおさに一本一本とおすアヤトシの手伝いもしました。

大雪で道がない所を腰まで埋もれて通つたことや、各持場対抗で演劇をしたこと、川徳のおつかさまの台所に呼ばれて笹団子を作る手伝いをしたことなどが思い出として残っています。あしかけ三十五年間の機屋勤めも倒産といつた幕引きで昭和五十一年九月三十日になりました。

「籠を出荷したものだ」と慢をしていました。これは落全体が楮生産に一生懸命でした。出荷先は七谷・狭口面で、加茂紙の原料として特に当家が多く出荷していました。出荷先は七谷・狭口面で、加茂紙の原料として現金収入を得たのです。大正時代を迎えると和紙陰りが見え、楮烟を桑烟にして養蚕を始めました。

と竹林になつていていたことに気づきました。この竹をなんとか改良し筍子を出そうと、早速気の合う佐々木友二さんに話し、良質な筍を栽培すべく先進地視察なども重ねました。これを見た他の人も仲間に入り、集落一丸となつて筍子出荷組合を結成するに至りました。最初は三条市場に出荷していましたが、量が増えるに従つて、新潟に出荷するよう

下条の奥地、大平部落、通称「山新田」。集落の始まりは戦国時代に遡り、守り本尊を背負つてこの土地に定住するようになつたと伝えられています。

私の祖父は明治二年



▲山新田閉村式 大勢の集落民が見守る中での記念撮影。このあと当時の下条中学校体育馆で閉村の宴が催された（昭和43年11月27日）

のほとんどの家でやり、蚕のじょうそく上蔟期には人手を必要とし、保田植え後の暇を利用して、保内や下条の長福寺等から大勢手伝いに来ました。生産した繭は柄尾まで馬につけて出荷したもののです。

戦後荒れた畑や山が、自然

県下第一の筍生産地として各地から視察も来るようになつたのです。

されて います。この地
に根を下して山間の少
し広い沢々に新田を切
り開き、山を開拓して
畑を作り、自給自足の

A black and white photograph of a group of approximately ten men in dark suits and ties standing in two rows outdoors. They are positioned in front of a large, prominent tree trunk. The men are looking towards the camera, and the background shows dense foliage.

民が見守る中での
下条中学校体育館
和43年11月27日)

別

大正期の文化活動

生涯学習の掛け声盛んな最近ですが、今を遡ること八十年前既に雄大な構想と高邁な理想を掲げ、市井の啓発に努めた団体がありました。□マン香る加茂文化の顛末記。

大正十年（一九二一）八月十七日から十九日の三日間、加茂町教育会、日新俱楽部、加茂町婦人会、青年会の共催で「精神講義講習会」という夏期講座が南舎（南小学校）で行われました。講師は曹洞宗（現駒沢）大學の忽滑谷快天学長、聴衆は四百名の盛会でした。

これが土台になって、大正十一年七月二十二日に「加茂研修会」が会員九十名（市川長助、石田友吉、丘山堅、二階堂鶏助、大谷昇一、田下政治、川口精吾、永井栄松、乙川文龍、小池堅磐、長澤勇吉、阿部精悟、皆川新蔵、皆川正蔵、早田正雄、小野塚伝次郎など。会長は西村大串、会費月額一円）で発足し、発会式には旧制新潟高等学校八田三喜校長が「何の為の知識か」という演題で記念講演を行いました。七月に加茂織物同業組合が事務所を新築し、階上に二百名以上収容できる会議室ができたので、それ

（加茂曉星高等学校校長 西村香積）

田亮（同）、関泰介（同）、江部鵬村、相馬御風、石丸梧平、河崎顯了（淨土真宗講師）、関口保（眞社会課長）、浅見隆平（弁護士）、新井石禅（曹洞宗管長）、西村大串（加茂朝学校長）、内田周平（国学院教授）、工藤得安（医学博士）。

会は午後六時半～八時半に開かれ、講師は次の人々などでした。高島平三郎（東京高師教授）、下村宏（法学博士）、滝精一（文学博士）、野上俊夫（同）、鳥山喜一（新潟高校教授）、黒

◆ 宮寄上の石動神社には幕末に七十枚余の天井画が奉納されています。うち一枚に「古川笑栄藤原國儀」と署名がありますが、この人物の経歴等が皆目わかりません。どなたか何かご存じありませんか。

探していきます



▲石動神社の天井画

市史編さんに参加しませんか？

市史編さん室では、市民のみなさまから体験記を募集します。戦時下の様子や戦後の窮乏生活、水害・雪害の苦労談など、あなたの生の体験をお寄せください。

詳しくは市史編さん室までお電話を！

今号でお知らせのとおり、加茂市史の機関誌である「レポート加茂市史」を発刊できました。加茂の魅力満載な冊が出来上がったと自負しています。当「市史だより」ともどもご愛読いただければ幸いです。

編集後記

◆お詫びと訂正◆

市史だより第四号の一ページ目に「漆漆書院主人」と掲載しましたが、正しくは「滚滚書院主人」でした。関係者にご迷惑をおかけいたしました。訂正お詫び申し上げます。

「レポート加茂市史」好評発売中

調査の成果報告を兼ねて「レポート加茂市史」創刊号が発刊されました。市役所関係機関にて1冊1,000円で販売中です。ぜひお求めください。

